

## 鰹漁業創始功労記念碑

座間味島の鰹漁業を記念して作られたこの碑を理解するには、歴史を少し知るといいでしょう。

沖縄地域で初めて鰹漁業を始めたのは慶良間諸島の人々でした。座間味生まれで村長も務めた松田和三郎（1853-1923）が、1895年に九州南部の鹿児島県と宮崎県から鰹漁師を招き、地元の漁師を訓練し、1901年に船を手に入れて、島で本格的に事業を始めました。

これが功を奏し、1910年代には鰹船11隻、10組合の勢力にまで発展しました。島の男性のほとんどが漁業に従事し、一方女性たちは出汁となる鰹節を製造する工場で働きました。鰹業は、島民財産の劇的な向上につながりました。例えば、座間味では子供たち全員が小学校と中学校に通うことができましたが、沖縄の他地域では当時、それは極めて異例なことでした。

松田和三郎は事業拡大を続け、鰹節は沖縄で、砂糖に次いで2つ目に大きな産業になりました。しかし昭和（1926-1989）のはじめに、不漁が続き、台風の被害、世界恐慌による大暴落などによって事業の運は突然後退します。座間味の漁師たちは、南洋諸島（パラオ、北マリアナ諸島、ミクロネシア、マーシャル諸島）まで漁場を拡大することを促されました。そして第二次世界大戦における漁船の徴用や米軍の空襲により全てを焼失したことによる中断を経て、座間味の鰹漁業は以前より大きな漁船で再開しました。しかし操船人員の不足など様々な問題のため、1976年に事業は終わりを迎えました。

この記念碑が作られたのは1922年です。鰹漁業は、その時もまだ全盛期でした。正面には「鰹漁業創始功労記念碑」とあります。裏面には、座間味の鰹業の歴史、右側面には松田和

三郎を始め鰹漁業発展のために尽力した人々、左側綿には記念碑設立の発起者（資金提供者）の名前が記されています。